

[書 評]

Bugár M. István

*A teológia kezdetei a jánosi tradícióban:  
a Melitón- és a Hippolitosz-dosszié*

(ブガール・イシュトヴァーン

『ヨハネの伝承における神学の始まり：  
メリトンとヒッポリュトスの文書群』)

Catena monográfiák 16., Budapest: Kairosz Kiadó, 2016, pp. 574,

ISBN 978-963-662-847-5, ISSN 1587-2599, B/5, 4200 Ft.

---

秋 山 学

本書は、ハンガリー・ペーチ大学の教父学センター（主宰：シヨモシユ・ローベルト教授、ヘイドル・ジュルジュ教授：本誌 48, 53, 54 号を参照）とカイロス出版社の共同企画による「カテナ・シリーズ」のモノグラフ第 16 巻に相当する。著者のブガール氏は現在、ハンガリー東南部の中心都市デブレツェンにあるデブレツェン大学の哲学主任教授を務めておられる。氏は、この 500 頁をゆうに超える大判の著書に先立ち、同じ「カテナ・シリーズ」の第 15 巻をも 2013 年に上梓しておられる（『自由・愛・人格：古代キリスト教神学の間学的影響』, 373 頁）。そのほか同じカイロス社より、2005 年には原典資料集『宇宙論的神学：ギリシア哲学の神論史に関わる原典集, 最初期よりキリスト教護教家に至るまで』（535 頁）を上梓しておられるが、これはブガール氏自身が責任編集者を務める「文化とロゴス：宗教史・宗教哲学原典シリーズ」第 4 巻に相当する。以上の他にも、古代哲学と教父学に関する氏の著書・論文は多数に上る。

本書は「ハンガリー国家博士号」に相当すると思われる「ハンガリー学術アカデミー (MTA) 博士号」の請求論文であり、「論敵」(“opponens”)の役割を務められた上掲のシヨモシユ教授による本書の書評が、インターネット上に公開されている。また本書巻末の 432～436 頁には、著者の流麗な英語によるレジメが付されている。膨大な本書を評するのはいささか骨が折れるので、評者もそれらを参考にしつつ、この大著の書評を試みたい。

序章は「神学とは何か？」と題され、「神について語ること」および「神学の

道」と題された二つの節より成る。このうち第2節の終項「協働」(シユネルゲイア)は東方神学のキーワードとして重要である。第2章は「2～3世紀における“神人同形論”の神学、否定神学、そして“パラドックスの神学”」、第3章は「メリトンの文書群」、第4章は「ヒッポリュトスの文書群」、第5章は「ヒッポリュトス、偽オリゲネス、その論敵たちの神学およびメタ神学」、そして第6章は「ヒッポリュトスの文書群における終末論」と題され、最後に「結論」が付されている。巻末には文献一覧、英語レジュメに加え、計130頁を超える関係資料原典訳が掲載されている。

ブガール氏とは、2005年、ハンガリー・ペーチで行われた第9回オリゲネス学会に評者が参加した際、はじめてお目にかかった。氏の発表は英語で行われたが、ハンガリー人の中で、氏の流暢な英語が特に印象に残ったのを覚えている。以来、氏はハンガリー教父学協会の要職を務めるなど、同国教父学の発展のために尽力して来られた。氏は、ハンガリーでは少数派の正教徒であるということ、現ギリシア・カトリック教会ミシュコルツ司教のオロス・アタナズ師より仄聞したが、本書は哲学・歴史学だけでなく、教父学をめぐるブガール氏の本領がいかに発揮された、他に比類のない著作だと言えるだろう。

ところで本書の特徴は、一言で表現するならば、メリトン(190年頃没)とヒッポリュトス(170年頃～235年?)という二人の教会著作家をめぐり、彼らを「ヨハネ的」、換言すれば「(小)アジア的」伝承の継承者として位置づけることにより、二人のうちに共通する特徴を浮き彫りにしながら「神学」の本質を問おうとした試みだということができるだろう。この際、本書で記述のための枠組みとして用いられている「ヨハネ的」あるいは「(小)アジア的」と称される神学の特徴として、著者は2点を挙げている。それはまず、①神について語る際、詩的・典礼的な言説を用い、合理的論証と哲学的実証に対しては限定的に信を置くこと、次に②この(非理性的なのではなく)「反・理性的」な立場が、影響力ある当時のキリスト教思想家の場合に比して、人間の知性よりも人間の肉体に大きな尊厳性と注意を払う人間論と、より高度に調和していること、の2点である。

これらの点は、本邦において「ヨハネ的」という形容がなされる場合、われわれが普通に想定する(主として聖書学上の、ないし聖書に発する)特徴と、その細部に至るまで完全に一致するとは必ずしも言えまい。したがって著者の切り口は、上述のような本書の哲学的方法論だけを取ってみても、極めて独創的なものであると言えよう。なお本邦では、メリトンについては加納政弘訳『過越について』および『諸断片』(教文館『初期護教論集』、2010年)がある一方、ヒッポリュトスをめぐっては、『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』(ポット著・土屋吉正訳、オリエンズ宗教研究所、1983年)、『ノエトス駁論』(小高毅訳、平凡社『中世思想原典集成1』、1995年)、『全異端反駁』(大貫隆訳、教文館、2018年)が既刊

である。ただこの二人については、文献学的な原典批判、および断片の分類整理に関わる作業が必須であり、しかもシリア語やアルメニア語その他、諸国語訳の形で残存する関係資料も無視できない。それらは著者により、本書において精査し尽くされている。

このような著者の文献学的秀逸性をよく示すのが、巻末 439～466 頁に載る、メリトンおよびヒッポリュトスをめぐり伝承されてきた「文書群」(dosszié) のハンガリー語訳文集である。メリトンの場合、掲載の順序は「断片と証言」『弁明』『悪魔と黙示録について』『抜粋』『過越祭』『洗礼』『鍵』『十字架についての説教』『主の日』『霊・肉体・受肉』そして『哲学者メリトン』となっている。上掲の加納氏による労作は、旧来の伝統ある断片番号を適宜踏襲したものであるが、ブガル氏氏は本書において新たな断片番号を施し、かつ諸作品への帰属についてもまったく新たな説を提示している。この著書において、メリトンの断片編纂に新たな地歩を築くというブガル氏の強い意志を感じることができるだろう。もっとも（ ）内には旧来の番号が付され、便宜も図られている。

一方ヒッポリュトスについては、「全異端反駁概要」『全異端反駁』（ただし第 1, 7, 9, 10 巻より関係箇所のみ）『アルテモン反駁』、それにアベッレスの断片と証言、そしてヒッポリュトスのテキストと断片より神学的箇所訳文（『創世記注解』『イサクとヤコブの祝福』『モーセの祝福』『バラファームの祝福』『モーセの歌（申命 32）について』『出エジプト記注解』『エルカナとハンナ』『詩編注解』『箴言注解』『雅歌注解』『ダニエル書注解』『タラントンの分配（マタイ 25:14-34）について』『聖なる過越』『キリストと反キリスト』）が順に続く。さらに「ヒッポリュトス文書群」に属す文書として、偽ヨセフ『万物（の実体）について』の断片訳が収められる。これに続き「ヒッポリュトスの終末論をめぐる諸断片」と題されて「復活」および「箴言注解Ⅶ」「ガイウス駁論」が載る。以上の書題に関しては、上掲小高師の『ノエトス駁論』解説を参考にした。また『万物について』に関しては、『全異端反駁』10,32,4 に「要参照」との言及があり、上掲大貫氏注の 527 頁（114）に詳しい。

本書はこのように、文献学的に複雑極まりない地平を切り拓いて見せる点で実に圧倒的なものであるが、さらに上述のように一見文学的な、すなわち詩的・典礼的な側面からのアプローチから説き起こしつつ、これを神学的次元にまで止揚する手法においても秀逸である。たとえばメリトンの場合、彼は『弁明』断片において、アッティカ風の文体と厳密な論証にも通じていることを示すが、それでも「詩としての神学」、すなわち隠喩、象徴的意味、対照法といった文節が、ここでは中心的役割を演じている。しかしながら、これらは単なる修辭的ないし詩的な装置に留まるものではなく、このような仕掛けによってこそ「信仰の神秘」(mysterion) が最も優れた形で表現されるのだ、という強い確信がそこに表現さ

れている、というのが著者の見解である。この「神秘」の秘密は、受肉した神、その存在自体が「パラドキシカルな」神人・キリスト自身にある（110頁）。

本書はこのように教父哲学ばかりでなく、文献学的にも非常に込み入った問題を論じ尽くすことの不可欠な領域に敢然と分け入った力作である。だが本邦の現状を顧みれば、この方面の問題を扱おうとする場合、最も良い導入書となるのが J. ダニエル 『キリスト教史 I 初代教会』（平凡社ライブラリー、邦訳 1996 年）であろうし、この状況には、国際的に言ってもおそらく大差はないであろう。ダニエルのこの書は、メリトンに関しても（以下章節番号：4-1 & 8-5）ヒッポリュトスに関しても（11-2）、簡潔な見取り図を与えてくれる。そしてダニエルは、ヒッポリュトスの「ローマ的性格」を指摘しつつも、彼が小アジアの伝統との接触を有していたこと、そしてメリトンから着想を継承していたことを、いち早く喝破しているのである（上掲 337 頁）。ところが本書は、参考文献欄において（他の著作も含め）ダニエルに関する言及を全く行っていない。これは著者が、典礼・教会史ないし聖書学的なアプローチを全く意図していないということを実に物語る。

このことに気づくなら、やや特異ともいえる本書の位置取りが次第に明らかになってくるかもしれない。評者が、自らの研究との関連においてこの書を読み進めたのは、メリトンについてはいわゆる「14 日派」との関連をめぐる関心からであったし、ヒッポリュトスについては、第 2 ヴァティカン公会議（1962-65）における典礼改革により脚光を浴びた『使徒伝承』の著者としての人物に対する関心からであった。けれども 14 日派に関する言及は、89 頁にわずかに認められる程度であり、『使徒伝承』についても 175 頁脚注で触れられているに留まる。

圧倒的なボリュームを見せる本書であるだけに、著者がその比類なき文献学的・哲学的力量をさらに駆使し、「ヨハネ的伝承」の水脈深くに分け入って、今後教会史や聖書学においてもこの水脈の豊かさを示してくれることを願いたい。